

キーワード:

歴史的建造物
環境デザイン教育
松ヶ岡
旧山崎家住宅
掛川市

抄録

筆者らは、掛川市の松ヶ岡(旧山崎家住宅)において、2016年度に常葉大学造形学部の学生を対象に、歴史的建造物の保存、活用を課題とした一連の環境デザイン教育を、所有、管理者である掛川市と連携、協力して行った。本稿ではその内容と意義を報告する。

1. はじめに

旧山崎家住宅は、掛川駅から徒歩15分程の掛川市中心部西側(掛川市南西郷(十王))に位置する。庭園内の松の大木に因んで松ヶ岡と呼ばれ、江戸時代末期から近代前半期の大規模民家の屋敷構えと景観を一体で残している(図1-7)。

筆者らは、この松ヶ岡(旧山崎家住宅)において、2016年度に常葉大学造形学部の学生を対象に、歴史的建造物の保存、活用を課題とした一連の環境デザイン教育を、所有、管理者である掛川市と連携、協力して行った。本稿では、文化財建造物としての松ヶ岡の、筆者との関わりを踏まえた上で、当該環境デザイン教育の実践を報告する。成果は、図学、製図を含む学生作品であり、またその作品や提案を市民に公開し発表する学生自身の体験である。また、学生が市民、行政とともに、発表会やワークショップに取り組むことを通して、歴史的建造物の将来の活用に資するものとなることを目的とした。

2. 松ヶ岡の概要とこれまでの経緯

松ヶ岡(旧山崎家住宅)の主屋は、安政東海地震後の1856(安政3)年に建てられ、小屋裏に三重の梁を架して耐震性能に配慮した構造形式を持っている。1878(明治11)年には明治天皇御巡幸の行在所(宿泊)となった。明治後期に新座敷等が増築されたと見られ、昭和前半期まで増築は続いたと見られる。長屋門や数棟の蔵の建設年もやはり幕末から明治期と思われる。

山崎家は江戸中期から現在地に移り、掛川における町人文化の中心となってきた。中でも文化文政期の第4代万右衛門(農園)は以善堂と号し、今でもこの号を記した額が邸内に掲げられている。明治期の当主であった第8代千三郎は、初代掛川町長となり、東海道線の誘致、掛川銀行の設立など地域の発展に大きな功績を残した。第7代徳次郎の長男覚次郎は、東京大学教授として近代日本の金融論、通貨論の先駆的な研究をした。山崎家は戦後掛川から離れ、その後松ヶ岡の建物と庭園は宗教団体が借用、管理してきた。

2012年、掛川市が土地、建物を買取り、現在、保存、活用に向けての計画を策定中である。建造物について

は東京藝術大学による調査が行われ、この結果を受けて掛川市指定文化財となった。2013-14年度に掛川市によって松ヶ岡保存活用検討委員会が、その後(継続中)には松ヶ岡建造物整備委員会(ともに委員長は柳澤伯夫氏)が設置され、筆者(土屋)も後者の委員となっている。

これまでの経緯 筆者(土屋)が松ヶ岡を最初に訪問したのは、1998年であったと記憶する。当時、静岡県内の大規模民家における近代和風建築の研究に着手しており、そのひとつとして松ヶ岡を訪ねたのであった。管理者であった横山茂氏は初対面にも関わらず、訪問の趣旨を理解され、邸内をくまなく拝見することができた。このときの結果は論文の一部としてまとめたが、当時は近代和風住宅の事例を意識的に見はじめた頃であり、当方にその価値を認める能力が十分ではなかった。

それから12年後、松ヶ岡を再訪したのは2010年の年末であった。このときは、他の研究で共同研究者となり、本学の非常勤講師でもある和田厚氏の紹介で、後に「松ヶ岡を愛する会」の代表となる小澤吉造氏との訪問であった。掛川市民の間では、松ヶ岡といえば誰でもその名を知っているが、長らく非公開でその内部に入った者は少ない、ということを知ったのもこの頃であった。この再訪時も横山氏は管理を続けておられ、無沙汰をしていた筆者を覚えてくださった。筆者もこの頃には和風住宅についてある程度目が慣れてきており、材木商でもある和田氏とともに見学したので、その価値を再認することができた。

その後、山崎家での相続問題が浮上し、一時期は民間への土地売却も検討されたようだが、2012年に掛川市が土地、建物を買取り、保存継承が決定した。この一連の経緯は新聞等でも報道され、筆者も当該敷地および建造物の価値についてインタビューを受けた。

掛川市の所有となってからは、本学の建築関連の授業で何度か学生の見学会を企画し、歴史的建造物を体験する場とさせていただいた。また、建造物については2013年度に東京藝術大学大学院(上野勝久教授、小林直弘非常勤講師(ともに当時))による調査が行



図1 松ヶ岡 長屋門



図5 松ヶ岡 米蔵。長屋門、主屋とともに表庭を囲む



図2 松ヶ岡 主屋。左に中門、その奥が玄関。右側内部はかつては土間



図6 松ヶ岡 米蔵。屋敷を囲む堀



図3 松ヶ岡 主屋。座敷前の庭



図7 松ヶ岡 北蔵。主屋背後の庭には蔵が並ぶ



図4 松ヶ岡 新座敷

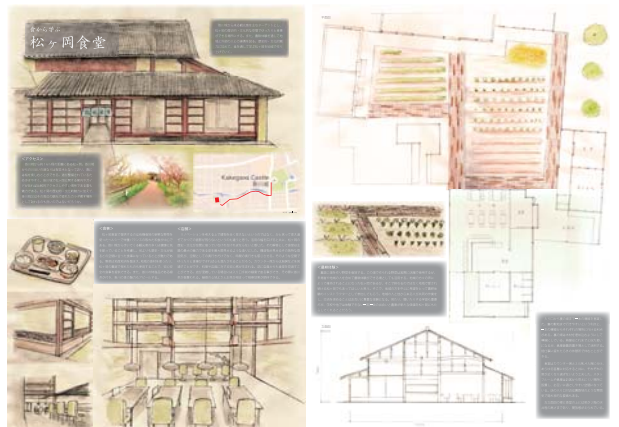


図8 リノベーション、コンバージョン提案
杉山一貴「食から学ぶ 松ヶ岡食堂」

われ、筆者も一員としてこれに参加した。この成果は『旧山崎家住宅調査報告書』(以下、報告書という)として刊行された。これらの間も絶えることなく、維持・管理をされた横山氏の尽力には真に敬意を表したい。

今回の企画に当たっては、上記のような長期にわたる経緯があり、地域の大学として文化財を通じた相互・信頼関係が基礎となっていると言ってよい。

3. 松ヶ岡のリノベーション、コンバージョン提案

造形学科環境デザインコース3年生(28人)の授業課題として、松ヶ岡のリノベーション、コンバージョン提案を4-6月に行った。

文化財建造物の保存と同時に活用を図り、近年文化財に限らず建築一般にも言われるようになったリノベーション(再生)、コンバージョン(転用)の今日的意味を学生が理解することも重要な目的であった。この提案にあたっては、都市・地域的文脈、歴史的経緯、建築的特性、地域への効果を熟慮すること、学生ならではの社会通念にとらわれない提案を期待するが、経済的実現性もある程度考慮することと指示した(学生の演習課題であり、実際の整備事業とは直接関係しないことは言うまでもない)。授業日程、課題要求等の概要は以下の通りである。

科目名: 建築設計B、建築設計C

(建築設計B(2単位)と建築設計C(1単位)は同時期に並行して進む。建築設計Bでは、複合機能をもつ建築物の設計を通して、建築設計製図に関する総合的な事項と技術を習得する。建築設計Cでは、建築設計Bを踏まえ、より今日的な事項と技術を習得する。今回は建築設計Bで取り上げた松ヶ岡を、地域性と歴史的環境を活かした施設、環境のサスティナビリティを高める施設とするため、建築設計Cにおいてその周辺の都市的文脈の中で考える。)

担当教員: 土屋和男(准教授)、伊達剛(非常勤講師)
(土屋: 全体統括、建築設計C、伊達: 建築設計B(特に建築設計、製図、パース等図学的要素を含むプレゼンテーション))

日程: 2016年4月13日-6月2日

第1・2週 現地調査、調査結果共有

第3・4週 提案の中間発表

第5・6週 現地調査、提案方針を最終決定

第6・7週 設計製図、模型製作

第8週 プレゼンテーション、講評

(うち2回の学外授業(現地調査)では、1回目は掛川市教育委員会から概要説明を受けた後、敷地内、建物の写真撮影等を行った。2回目は市民の方々からの意見聴取、1回目調査および検討を経ての現地

確認、追加調査とともに、敷地周辺の川、道路の状況、掛川城、大日本報徳社付近との関連性を現地調査した。)

条件: 屋敷構えのうち、主屋座敷部分、新座敷およびそれらが面する中門より内側の観賞用の庭は、保存すべき部分として、現状維持または復原を基本とする。

リノベーション、コンバージョンを提案する部分は以下の3ゾーンとする。

A. 屋敷前の駐車場、長屋門、中門までの表庭、米蔵

B. 主屋の旧土間部分

C. 主屋背後の庭、奥蔵、西蔵、北蔵、味噌蔵

提案は、次のいずれかとする。

1. いずれか1ゾーンを選び、全体の活用計画の概要と、1ゾーンについて詳しい提案を行う。
2. いずれか2ゾーンを選び、全体の活用計画の概要と、内外を一体とした提案を行う。
3. すべてのゾーンを対象として、全体的、連続的な活用計画を提案する。

要求図面等: 上記A,B,Cおよび1,2,3に応じ、配置図、平面図、断面図、立面図のうち適宜必要な図面を作成する。縮尺は1:100を基本とするが、必要に応じ変更可。

(既存建物の図面は、報告書収載図を参照)

なお、掛川市を介して静岡文化芸術大学の天内大樹講師と打合せ、同大学デザイン学部3年生の課題としても松ヶ岡を取り上げることとなった。両者で共通に学生に伝えたことは以下の通りである(これ以外はそれぞれで設定)。

問い: 建物の sustainability(持続可能性)とは何か

1. 古い木造建築が本当の意味で街とともに維持され続ける理想的な在り方とは。
2. 街が本当に必要としていることと、それに対してこの建物が提示できる応答とは。
3. 最低限の操作で最大限の効果を発揮できるようなりノベーション、コンバージョンとは。

プロセス: 調査はチームで行い、発表は個人で行う

1. 調査の分担、範囲と深度を考慮しながら、スケジュール内に上記の問いを念頭に調査する。
2. 調査結果を共有しながら、各人の提案に向けた追加調査も進めつつ、自分の発想を尖らせる。
3. コンセプトの明快化とともに、建築を専門としない人にも判りやすい提案を作成する。



図9 リノベーション、コンバージョン提案
福嶋千慶「結い 公の園に集う」



図13 リノベーション、コンバージョン提案
鈴木美琴「いつでもバザー」



図10 リノベーション、コンバージョン提案
田崎ひかる「TOUGEI in MATUGAOKA」



図14 リノベーション、コンバージョン提案
本多真琴「Cultural Workshop」

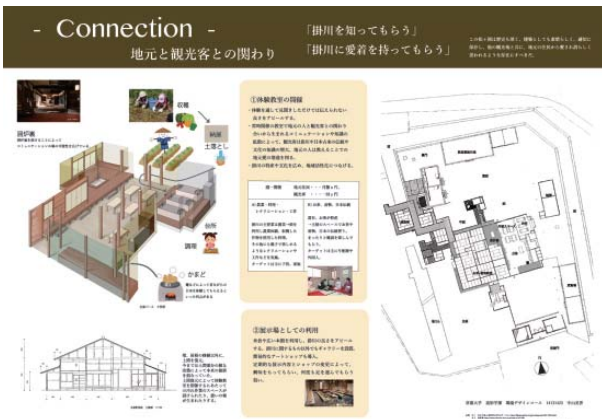


図11 リノベーション、コンバージョン提案
中山美香「Connection 地元と観光客との関わり」

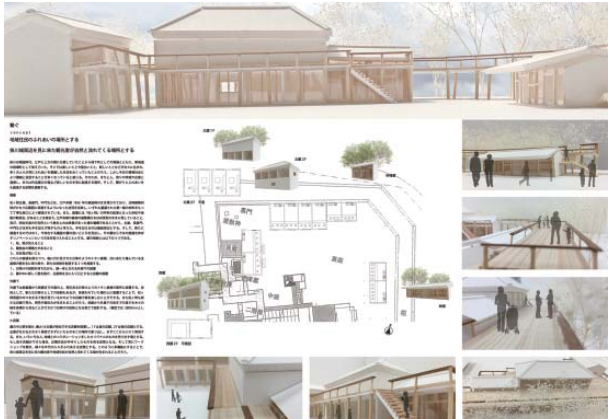


図15 リノベーション、コンバージョン提案
石間克弥「繋ぐ」

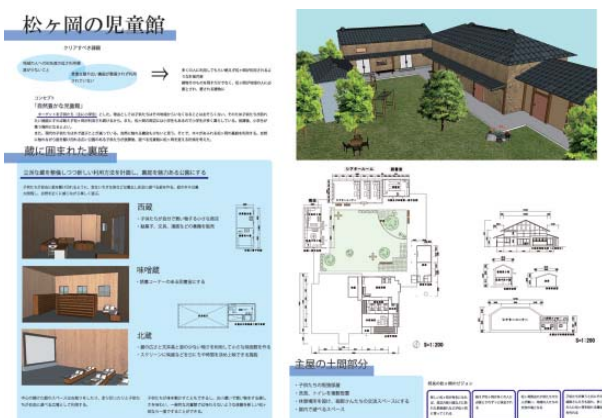


図12 リノベーション、コンバージョン提案
杉山由記「松ヶ岡の児童館」



図16 リノベーション、コンバージョン提案
大村吉輝「松ヶ岡の松カフェ」

また、授業の進行にしたがい、リノベーションの定義というべきものを以下のようにまとめた。

建築のリノベーションとは：

既存の建築(モノ、空間)の(ときには見えにくくなっている)(本来の、または時間を経た)価値を発見し、その価値を展開するための修理、除却、補強等を行うことで、新たな価値を創造すること。

そのためには、既存の建築の、

プラス：価値のあるところ：残すべきところ

マイナス：価値を落としているところ：修理すべきところを整理して、その建築的な解決法を考える。

この授業においては、2ヶ月足らずの短期間で、広大な建造物群と庭園を把握し、併せて地域的、歴史的な文脈を考慮しなければならず、難しい課題であり、結果としては消化不足のものも多かった。しかしながら、学生達にとって、何よりも長い時間を経過した歴史的建造物に実地で触れ、その価値に向き合ったことは、地域社会のストックを資本とする今後のまちづくりを学ぶ上で、得がたい体験であったと考える。

本格的な公開に至っていない松ヶ岡では、整備着手前の古い建物の姿を見ることができ、また他の見学者を気にせず実地調査ができたこともプラスであった。

さらに、授業成果のなかから選抜して8月に公開の発表会を行った(図8-18)。ここでは前述の静岡文化芸術大学の課題とも連携して、共同の講評会を企画した。このときは市長、教育長をはじめとした行政関係者の他、まちづくりに尽力している市民の方々など約60名が主屋の座敷に集った。自らの作品を発表した学生たちにとっては、きわめて貴重な体験であったとともに、指導した教員にとっても緊張の場面であった。

以上のように、松ヶ岡のリノベーション、コンバージョン提案では、造形学部環境デザインコースの授業と連動し、授業で得られた教育成果を地域に発信し、また、その反応を学生の教育へ反映した。

4. 天井はがしワークショップ

松ヶ岡の主屋は、江戸時代末期の住宅で、安政地震直後に耐震性に配慮してつくられたと見られる。しかし、その小屋組(屋根の構造)は、昭和30年代の後補の天井が張られていることによって見る事ができなかった。そこで、建物を管理する掛川市教育委員会、市民団体「松ヶ岡を愛する会」有志らと協働して、旧土間部分の「天井はがしワークショップ」を実施することとした。

実施日：2016年10月29日

(当初は2日を予定していたが、作業そのものは1日で終了し、2日目に予定していた学生達は作業後の第一見学者となった。)

指導：土屋和男、和田厚(非常勤講師)が立ち会い、行政および建築関係者の指導の下で行った。作業にあたってはヘルメット、手袋等を着用し、安全管理を徹底した。

当日は着手前に神主を招いて、関係者一同がお祓いを受けることから始まった。これは宗教的意味よりも、工事の安全を祈願するとともに、160年を経た古い家に手をつけることの畏敬の念から発案されたことであろう。

続いて、掛川市の文化財保護審議委員を務め、松ヶ岡建造物整備委員会の委員でもある秋山兵三氏から文化財建造物工事の心得を指導された。秋山氏は文化財建造物保存技術協会で長年文化財建造物の修理に携わってこられた専門家である。学生はその後のワークショップの間も秋山氏のご教示を受けていた。

実際の天井をはがす作業は専門的な技能を必要とすることから建築関係者が行ったが、作業補助、運搬、記録、撮影等の作業に学生有志が参加した。これをワークショップと位置付け、文化財の現状変更の記録補助、天井裏に堆積した埃の回収など、一般にはほとんど体験できない作業を行った。前者は文化財保護法に定められた文化財建造物における工事変更箇所を記録するものであり、後者は後補材料などに古色を施す際に役立つその建物の埃を保管するものである。

後補の天井が取り去られ、三重の梁を架けた豪壮な架構が姿を現す様子は、文化財建造物を理解するこの上もない教育機会となった。翌日には早速小屋組がライトアップされ、その全貌が暗闇から浮かび上がった。

また、取り去られた後補部分の意味も、それを運び出しながら考えさせられた。これは戦後、長年管理された横山氏が建物を使い続け、住み続けるために施工されたものであり、後補といえども現在に至るまでに建物が必要としてきた改造だったのである。新築の建築を勉強していただいただけでは決して思い至らない、長い時を経た建物だけが教えてくれることであった(図19-24)。

5. パンフレット、ポスター作成

松ヶ岡は現在のところ、保存活用計画が策定され再整備が行われるまでの暫定的な状態にあり、第4土曜日のみの限定的な公開にとどまっているため、ビジュアルなイメージをもつパンフレットやポスターが存在しなかった。そこで、当該建造物の価値を一般来訪者に紹介し、あわせてこの事業における本学の関わり、



図 17 リノベーション、コンバージョン提案
公開発表会。市民、行政関係者らが主屋座敷に集った



図 21 天井はがしワークショップ
作業中の様子。記録補助をする学生



図 18 リノベーション、コンバージョン提案
公開発表会。模型も展示した



図 22 天井はがしワークショップ
古材から埃の回収を行う学生



図 19 天井はがしワークショップ
着手前の旧土間部分。天井が張られている



図 23 天井はがしワークショップ
終了後の旧土間部分。小屋組が現れた



図 20 天井はがしワークショップ
着手前、文化財建造物工事の心得を専門家から聞く



図 24 天井はがしワークショップ
旧土間部分見上げ 長い梁を重ねた架構

取組みを紹介するパンフレットを、本学のデザインによって作成した。コンテンツの提供を掛川市教育委員会および「松ヶ岡を愛する会」から受け、そのデザインを学生と教員が共同で行った。これまでの取り組みを反映させて2016年12月から着手し、翌年3月に完成した。

松ヶ岡のリノベーション、コンバージョン提案に取り組んだ学生が、その体験をもとに自主的に関わり、デザイン活動の場をつくる教育的効果があった（図25-27）。

6. 歴史的建造物を通じた環境デザイン教育

今回の一連の活動では、松ヶ岡を所有、管理する掛川市、同教育委員会の全面的な協力を得た（特に都市政策課の松本一男氏、社会教育課の鬼澤勝人氏には事前の段階から大変お世話になった）。また、実質的な維持（日常の清掃等）を行っている市民団体「松ヶ岡を愛する会」（代表：小澤吉造氏）とも協力関係を築いた。本学の日比野秀男名誉教授は現在掛川市二の丸美術館の館長であり、和田厚非常勤講師は保存を進めてきた市民のひとりである。これらにより緊密な連携が取れた。これら一連の活動は、中日新聞（2016.4/15、8/13）、広報かけがわ（2017年2月号）等を通じて報道された。

歴史的建造物を通じた環境デザイン教育の最大の特徴は、既に時間を経た建物が存在するという点にある。学生が実際の空間、物に触れることは、教室では決して得られない実感を伴う。畳の上で正座したひととき、木目が浮き出た木材の感触、蔵の中の埃とひんやりした空気などが、学生たちの記憶に残ったならばうれしいことである。

従来、建築系の演習課題は、更地の敷地に新築の建物を、要求されたプログラムに沿って設計することが通常であった。しかし、ストックを活かし新たな価値をつくる、リノベーション、コンバージョンという方法が一般化しつつある社会的状況で、建築、環境デザイン教育にも、既存建物を題材とした課題が求められるであろう。

今回の課題とした松ヶ岡は、文化財としての評価が定まった指定文化財であり、歴史的な価値を保存し、持続させることが義務づけられた建物である。一方、文化財といえども建築物である限り、活用なくしてはその維持、保存もできない。維持、保存のためには、傷みが進行し、現代的な使用に耐えられない現状に手を加えなければならないが、この際に重要になるのが、どこを、どのように再生し、どこを、どのように転用するのか、という判断である。これには現状の建物を観察、調査し、そのプラスとマイナスの価値を判断した上で、どのように使うのか、という活用法のビジョンがなくてはならない。つまり、新築の場合はプログ

ラムが先行し、建築の形が導き出されるのに対し、既存建物の場合は建築物が眼前にあり、そこから活用プログラムが考え出されるのである。

今回、学生達はきわめて短期間で、上のプロセスに取り組んだわけである。これは専門家にとっても難易度の高い仕事であり、未熟な学生達にとっては、たいへん難しい課題である。しかしながら、前述の通り、ストック活用型のこれからの社会にあっては、こうした経験は学生の将来にとって意義あるものと考えられる。

他方、こうした活動によって、若い学生が古い文化財建造物に出入りし、市民と交流することで、地域の方々に松ヶ岡の価値を再認識していただくという効果もあったようである。若い世代が、新築ではなく、時間を経た場所や物に魅力を感じているということは、筆者らも実感している。この感覚がリノベーション、コンバージョンに取り組む動機であろう。そしてこの感覚は、現在、建築デザイン分野では世界的に共有される傾向にあると考えられる。

建物にとっては、こうした活動そのものが活用実験であり、もともと意図されていたのとは違う使い方を、様々に試してみることを通して、現状の欠点も見え、また建物、空間の特徴も再認識されるであろう。

今回の試みを期に、課題の設定等を改善しながら、歴史的建造物の保存、活用を課題とした環境デザイン教育に継続的に取り組んでいきたいと考えている。

謝辞：文中に記した掛川市民、同市役所、同市教育委員会の方々をはじめ、ここに記すことができなかった多くの方々にお世話になりました。深く感謝申し上げます。また、本内容は平成28年度常葉大学地域交流・連携推進事業「掛川市、松ヶ岡（旧山崎家住宅）の学生による活用提案および活用実験」（土屋和男（代表者）、神津宏昭）の成果です。

参考文献：

東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復建造物研究室『旧山崎家住宅調査報告書』掛川市教育委員会、2015
『松ヶ岡保存活用検討事業報告書』松ヶ岡保存活用検討委員会、2014



松ヶ岡の屋敷構え

旧山崎家住宅の庭には、赤松の大木があります。これに因んでいつの頃からか、この屋敷は松ヶ岡と呼ばれるようになりました。屋敷の中心となる主屋は安政地震直後の安政3年(1846)に造られ、耐震性に配慮した構造が見られます。明治11年(1878)には、明治天皇の北陸東海御巡幸の行在所(はんざいしょ)となりました(昭和8年国指定、23年国指定)。このことから、明治期、この地域で最も格式の高い住宅であったことがうかがえます。明治から大正初期にかけては、近代和風の奥座敷棟が増築されました。屋敷は堀を巡らし、長屋門を構え、いくつもの蔵が並んでいます。これらの屋敷構えが一体として残されていることは、きわめて貴重です。



掛川市指定文化財

松ヶ岡 旧山崎家住宅



裏と堀：
主屋の裏には蔵が並んでいます。その背後には堀が屋敷を囲んでいます。両岸を石垣積みによって形を整え、かつては逆川から水を引き、屋敷南側の田圃に配水していました。

松ヶ岡の人々

山崎家の初代、万右衛門(山崎才兵衛、生不明～宝暦5年(1755)没)は、旧伊達方村寺ヶ谷の山崎弥左衛門より分家し油商を営み、後に掛川城下西町に移って隆盛をあげました。以後、代々万右衛門を名乗り、掛川における町人文化の中心となり、近代化の立役者も輩出しました。

山崎万右衛門 第4代 明和8年(1771)頃～文政11年(1828)

名は胤、字を儀園(しんえん)、号は以善堂(いぜんどう)。
掛川藩から御用達として五人扶持、首字帯刀を許され、藩政に参画しました。掛川藩校教授松崎律堂に師事し、学問に秀で文才も豊かでした。今も境内には「以善堂」の額が掲げられています。



山崎千三郎 第8代 安政3年(1856)～明治29年(1896)



兄徳次郎の助力の下、初代掛川町長となり、地方行政、交通基盤整備、掛川銀行の設立など地域振興に尽力しました。
大井川疎水計画：掛川町と小笠原下への用水事業を計画し、測量を行いました。その計画は現在の観音園とほとんど一致しています。
交通基盤整備：掛川の街の基礎を築く各種インフラ整備(東海道線誘致、トンネル掘削、掛川街道整備、森掛川馬車鉄道など)を行いました。
金融・経済整備：日本金融経済黎明期の明治13年、掛川銀行を創設しました。

山崎覚次郎



明治元年(1868)～昭和20年(1945)
第7代山崎万右衛門・徳次郎の長男。松ヶ岡で生まれ育ち、岡田良一郎の東北学舎で学び、東京帝国大学卒業後、ドイツに留学。東京大学教授として日本の金融論、通貨論の先駆的な研究をし、日銀の政策にも関わり、皇室では国際金融問題のご進講も務めました。

庭園：

初夏の陽射しに輝く新緑、冬の光に映える紅葉など、四季折々の表情が見られます。春祝には鞍馬石が用いられています。庭は特定の客と主人のみに許されたもてなしと趣味を示す空間でした。



長屋門と玄関：

松ヶ岡を訪ねるとまず長屋門が出迎えます。長屋門を渡って主屋前になると、左の堀に中門が開いています。その奥に式台付の玄関があります。江戸時代、門と玄関は武士を迎えることを意味し、この家の格式を示していました。



図 25 パンフレット 表 (A3, タテ3×ヨコ3折) (製作：石間克弥)

以善堂 善い人が集まり、善い人を育てる所



③奥座敷：
主屋の背後にある奥座敷様は、明治期に増築されたと考えられます。近代になり可能になった物資を背景に、豊良の材木を用いて建てられました。壁には金庫蔵もあります。

①主屋の小部屋：
主屋の東側はかつては土間でした。見上げるといくつもの材木が組み合わされた大きな屋根の構造が見られます。ここから発見された棟札により、安政3年の建設と判明しました。大地震直後に耐震性を考慮してつくられました。



②表座敷：
主屋の庭に面した位置に表座敷があります。明治天皇の御巡幸では行在所（あんざいしょ＝宿泊所）となりました。このため戦前は家人も立ち入れなかったそうです。欄間には松の意匠が施され、畳敷きの広縁には大きなガラスの入った障子があり、音のガラスのために、そこから見る庭の風景は少し歪んで見えます。



「松ヶ岡プロジェクト」地域の市民、大学と協働して、松ヶ岡の保全、活用に取り組んでいます。

「以善堂（＝善を以ってなすところ）」と「土」の掛川城、「農」の報徳社、「町人」の松ヶ岡を基本理念に、松ヶ岡を永く後世へ保存し、文化の拠点として未来を担う子どもを育てる場を目指す事業です。このプロジェクトは、「松ヶ岡プロジェクト推進委員会」を中心に、官民協働により実施しています。

○松ヶ岡の市民活動

地元住民を中心とした有志が「松ヶ岡を愛する会」を結成。毎月第4土曜日に建物内外の清掃や、庭木の手入れ、門松づくり、小修理などを行い、松ヶ岡の保存・活用活動を自主的に展開しています。また修復・復原作業として、近年の改装で土間部分に設置されていたベニア製天井の撤去を行いました。文化財建造物専門家指導の下、「愛する会」を中心にプロジェクト推進委員会と大学機関とも連携して協働で実施し、建築当時の見事な小屋根組みが姿を現しました。



○大学機関との連携

松ヶ岡は大学教育における生きた教材となっています。建築教育における歴史・意匠の見学、活用提案とその発表会の実施、修復・復原作業のボランティア活動など、実地でしか体験できない機会を提供しています。2016年度には、常葉大学と静岡文化芸術大学が同一課題の活用提案を行い、市民に向けて発表会を行いました。また、このパンフレットやポスターも、常葉大学との連携によって作製されています。



*平成28年度常葉大学地域文化庁・建築建造物部
*制作者：松ヶ岡（旧山崎家住宅）の学生による活用提案および活用実証



松ヶ岡付近の探索スポット

①掛川城御殿



掛川城天守の東側に書院造の御殿があります。松ヶ岡と同時期につくられ、江戸時代の藩の政治や大名の生活が偲ばれる貴重な建物として国の重要文化財に指定されています。TEL 0537-22-1146 <http://kakegawajo.com/>

②大日本報徳社



二宮尊徳の「報徳の教え」を広める全国組織の本社です。国の重要文化財の大講堂を始め、明治期を中心に建てられた建造物群が見学できます。TEL 0537-22-3016 <https://www.houtokusya.com>

③逆川沿いの「緑の精神回廊」



掛川城から松ヶ岡までの道のりは逆川沿いがおすすです。「緑の精神回廊」と名づけられた散歩道の一部で、市民の手により維持、管理されています。



掛川市指定文化財 松ヶ岡（旧山崎家住宅）

所在地：掛川市南西郷 838（十王）
（掛川駅北口より徒歩約 15 分）
（掛川城天守より徒歩約 15 分）

公開日時：毎月第 4 土曜日
10:00-15:00 無料 駐車場約 10 台

お問合せ：掛川市教育委員会 社会教育課 文化財係
tel 0537-21-1158 fax 0537-21-1222

制作：松ヶ岡プロジェクト推進委員会、松ヶ岡を愛する会
掛川市教育委員会、常葉大学
デザイン：石間克弥 イラスト：水谷みなも 監修：土屋和典（常葉大学造形学部）
発行日：2017 年 3 月

図 26 パンフレット 裏（A3、タテ 3 × ヨコ 3 折）（製作：石間克弥、イラスト：水谷みなも）

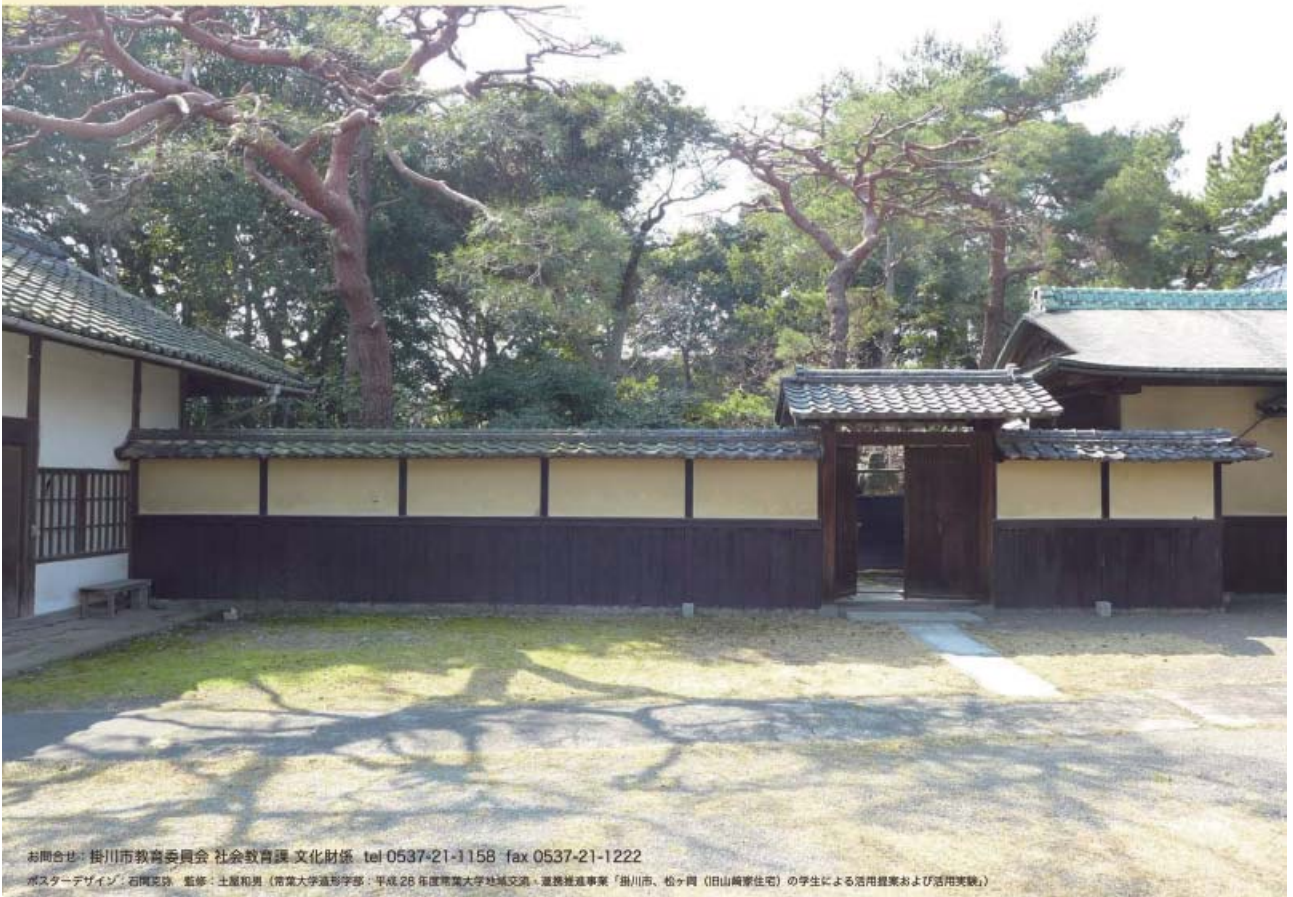
掛川市指定文化財

松ヶ岡 旧山崎家住宅

赤松の大木に因んで、松ヶ岡と呼ばれた屋敷。
城下町掛川の町人文化の中心となり、近代化の立役者も輩出しました。
主屋は安政地震直後の耐震性を考慮した造り。明治天皇の行在所にもなりました。
堀を巡らし、長屋門を構え、いくつもの蔵が建ち並ぶ屋敷構えは、きわめて貴重です。
掛川市では現在、地域の市民、大学と協働して、松ヶ岡の保全、活用に取り組んでいます。



掛川市南西郷 838 (十王) (掛川駅北口より徒歩約 15 分)
公開日時：毎月第 4 土曜日 10:00-15:00 無料 駐車場約 10 台



お問い合わせ：掛川市教育委員会 社会教育課 文化財係 tel 0537-21-1158 fax 0537-21-1222
ポスターデザイン：石間克弥 監修：土屋和男（常葉大学通形学部：平成 28 年度常葉大学地域交流・連携推進事業「掛川市、松ヶ岡（旧山崎家住宅）の学生による活用提案および活用実践」）

図 27 ポスター（A2）（製作：石間克弥）